フォト・ドキュメンタリー「ＮＩＰＰＯＮ」２００６
対談：奥山淳志　×　小林キユウ

Guardian Garden PRODUCED BY RECRUIT

この対談は、出品者と選考員が、展覧会を目前にして作品の理解を深めようという主旨で行うものです。
１週目は、岩手県に移住してそこに住む人々と生活を撮影した奥山淳志さんと選考員の小林キユウさんです。

●宮沢賢治の世界に惹かれて

小林：今回の審査は、初めに１５作品くらいに絞って、そのあと１週間後に最終の５作品を選んだんです。地方をテーマにした作品がいくつかあって、初めは沖縄の作品が注目されていました。本土と異なる独特の風土が感じられて海や空が青くてパッとしていて。奥山さんの作品は、どちらかというと地味な存在だったけど、１週間でじわじわ効いてきたんです。

奥山：そうですか（笑）。僕もドキュメンタリーというにはあまりにも何事も起こらない日常を撮っているので、その辺がどうかなとは思ったんですよね。

小林：他の写真と比べて強かったのは、奥山さん自身が移住してここに暮らしていたこと。長い間、旅行者としてではなくて生活者としてそこにいて撮ってるという事実の強さ。

奥山：例えば、スーパーが一軒できたら、田んぼだったその周辺にマクドナルドができて、吉野家、ユニクロって、あっという間に街が変化したんです。そういう社会的なテーマも写真になるとは思うんですけど、僕はそういったものよりも、暮らしている人の心、メンタルの変化、そういうのに興味があって、人の日常の何かちょっとした思いを撮りたかったんです。

小林：岩手県の雫石って、小岩井農場のある所なんですね。

奥山：宮沢賢治の詩や童話の舞台になっていて「盗森」、「狼森」とか。初めは賢治の舞台を見てみたいなと思ってここに通うようになった。そのうちにこの土地に住んでみたら何が見えてくるかなって。

小林：それでここに移り住んだのが８年前ですか。実際に住んでみてどうですか？

奥山：風景も暮らしている人もすごく牧歌的です。住まいは、もともと農家だったところを借りてるんです。まわりはみんな農家。

小林：僕も以前、新聞社に勤めていたことがあって、長野県の木曽のすごい過疎地に３年くらい住んでました。歓迎されるのは学校の先生と警察官だけだって面と向かって言われました。そういう感じの、よそ者に対する不和は？賢治の理想郷に東京から通っている旅行者としてよく見えたものが、現実にはどうでした？

奥山：僕の場合は、すごく馴染みやすい土地だった。家を借りるときは、よそ者扱いというより、心配してくれて、東京から来た人が雪が２ｍにもなる所に住めるわけないって。初めに連れていかれたのは町なかにあるアパートでした。こんなところに住みたくないって無理矢理今の所を借りたんです。もちろんよそから入ってきて大変な部分はあると思います。だから集落の共同体の中に入って一緒に仕事をしたり、そういうのは全部参加するようにしています。

小林：僕の時は、田舎の人は冷たいよなって思ったんですけど。

奥山：今思えば、引越した時は２５、２６歳で若かったから、こいつ色々教えてやらなきゃ死んじゃうな、みたいなのがあったんじゃないですかね。

●なぜここに住むのか？

奥山：生まれたのは大阪の団地で育ったのは新興住宅地でした。幼稚園から奈良に移って。新興住宅地は、一時期に一定の世代の人たちが入ってきて町を作って、やがて子供たちが出ていき老人と犬しかいなくなって。そういうのが帰郷のたびに感じられて、この先が不安になる。雫石町だって過疎は過疎なんですけど。雫石町の人口は横這いで、１万９千人。２万人を目指しているんです。

小林：僕がいた木曽の町は人口８０００人を割っていました。村によっては２０００人いなかったりとか。２０代の人を１回も見なかった（笑）。

奥山：僕の所では、若い人はいるけど、暮らしが全然違う。会社と家を往復しているだけで、たまに車ですれ違うだけで。

小林：東京でも大阪でも沖縄でもなく、この東北の小さな町から日本を見たかったみたいなことが応募用紙に書かれていたんだけど、ここの写真を通して一番伝えたかったことは？

奥山：雫石って、例えば沖縄のように古い伝統が色濃く残っているようなこともなく、どこにでもある田舎。日本中、そういった田舎が無数にある。多くの人が田舎に生まれ育って、例えば親や祖父母の故郷がそういう地方だったり、何かしらありふれた田舎がルーツにあったりする。そういう土地をよくよく仔細に見てみると、何か変化がある。そういう日本の「今」っていうのを写せないかなと思ったんです。

小林：この作品を見た時に、僕が住んでいた木曽の風景を思い出したんです。僕が一番最初に出した『トーキョー・オムニバス』という本は、その山奥に住みながら東京を撮っていた作品なんです。だから何か共通する思いを感じたんですよね。日本って３つに分けると、まず過密な都市と、その周辺にある郊外。写真ってその２種類はすごく多いけど、リアルタイムな過疎をちゃんと撮ってる作品はすごく少ない。写真を撮る人間って大都市に集中して住んでるんですよね。そうすると、大都市の写真が多くなる。１人でこういう風にちゃんと自分の生き方として写真を撮ってる人って、まず田舎ではいないですよね。その辺でくじけそうになったことは？

奥山：確かに、こういうおじいさん達にとって、写真っていうのは、記念写真とか、結婚式の写真のこと。だから普段の姿を撮るっていうことは何の為に撮るかっていうことを説明しなきゃならない。

小林：でも逆に普通の人は殆どがそうかもしれませんね。まわりにこういう写真を撮ってる人達っているんですか？

奥山：いわゆる広告写真や写真館の写真を撮ったりっていう人はいるんですけど、こういう風に写真を撮ってる人はあまりいませんね。

小林：東京だったら、写真の仲間がいたり発表する場もたくさんあって、孤立感みたいなものは少ないと思うんですが、そういう思いはないんですか？

奥山：僕にとっての写真は、「この土地で生きている」ことの意味を考える行為というか……。単純に発表する為じゃない。もちろん、いつか見せたいという思いは当然あるんですけど、その前にこういう人だったり風景だったりを考える機会ができたらなと思って。だから暗室作業は僕にとってすごい重要。プリントしている時にその人の言葉を色々考える。例えばこのおじさんだったら、若い頃家出して浅草の町工場で働いていたら、突然お父さんが「頼むから帰ってきてくれ」って迎えに来て、今はお父さんの仕事継いでいる。そういう、人の生き方とかを考えたり。

小林：そこでもう一度自分の中で土地と向き合う？

奥山：そうですね。僕はいつまで経ってもやっぱり外から来た人間なんで。だから、事あるごとに「なんでこの土地に住んでるのか」という風に問う。自問もあるし、先ず他人に聞かれるんですよね。だから自分の中の問題でもあるし。一番簡単な答えは「好きだから」なんですけどね。

小林：こんな雪の降る所、なんで好きなんだって？

奥山：いまだに向かいのおばあさんから、例えば何日か僕が留守をすると、「ついにあの人は田舎が嫌になって東京に帰った」って。戻ると「帰ってきた、よかった」って。何年経っても言われる。引っ越すとしても東京に住むというのはないと思いますね。

小林：雫石の前は、東京の出版社にいらっしゃって、東京が嫌いになったという部分もあるんですか？

奥山：嫌いというか、どうしても僕の興味が東京よりもこういう地方にあったんですね。撮りに行ってまた帰ってくるという作業がなんか違うなと。自分にとっての中心の持っていき方がわからなくなってきて。

小林：実際に移り住んで、撮る写真も変わったんですか？

奥山：人を撮るようになりました。それまでは、風景というか自然を撮っていたり。人と向き合って何回も繰り返し撮れて、内面というか、その人が変わっていく様子も見れるし。

小林：お互いの関係性も当然変わる？

奥山：ある日突然、ずっと撮っていたおじいさんが亡くなって。本当に働き者でいっつも畑に姿があって、自分の身体感覚だけを頼りにしてるような人でした。風景はその人がいることで成り立っていたんですが、突然ポンといなくなって。死ぬというより、いなくなる感覚。それをじわじわ理解していくんですよね。そういうのってここに住んでることで初めてわかるのかなと思ったりします。

●外側からの視線

小林：この人達は、「疑いようのない存在」という感じですね。都会ではいないような、その人そのものがすぐ見えてくる。多分、写真を見に来た人もホッとできる写真ですよね。

奥山：でも、住んでる若い人にとっては、正直言って、すごい嫌な風景だったりする……。

小林：僕も過疎地にいた時、東京から来た友達に「いいところですね、空気がきれいで」って言われて、そういう言葉を聞くと本当に腹が立った。明日帰る人達のその発言の無責任さが嫌でした。奥山さんがここで生まれ育っていたらまた違っていたかもしれませんね。自分の知らない、今まで知りえない人達という、そういう驚きもこれを撮る原動力になっているのかなと思って。

奥山：それは全くそうですね。ここに移り住んだ時にまず思ったのは、僕が見てきたおじいさんの世代より一世代前の人達と出会えたと思ったんですよね。だからなんとなく間に合ったっていう感じもした。それこそ炭焼きでずっと暮らしているおじいさんと出会った時には、こういう生き方があるんだと驚きました。この土地でさえ最後の世代だし、後に続く人はいないので。

小林：逆に考えれば、奥山さんみたいな外からの視線だから、こういう人がもう消えつつあるんだって気付くんですよね。そこの住民であると同時に、異郷から来たという両方の顔を持っているところがこの作品を作らせたんだと思う。ここに生まれ育った人の視線だと、都市化していく部分を強調したくなると思う。僕がかつていた田舎のパンフレットなんかは、表紙が「何とかトンネル開通」っていうのだったり、町で出す年賀状は「木曽大橋完成」とか。

奥山：その辺でズレがありますよね。この人達にとって自然ってまだまだ共生というより、格闘する部分。それと例えば手で薪を割るっていうこと自体、「自分はやってるけど、こんなことはもう時代遅れなんだ」という感覚が常にあるみたい。その土地でずっと生きている術をすごい誇りにしているかっていうと、またちょっと違うんですよね。

小林：このおじいさんたちは「ロハス」なんて言葉は知らないでしょうね。全く別の世界で生きてるっていうのがいいですね。そこが日本の多様性の部分のドキュメンタリーになってると思うんですよね。

奥山：こういう人達の物の見方って、例えば僕達と同じ窓から見てないように感じるんですよね。多様性の窓がいくつもあるとしたら、同じものを見るにしても僕はこの窓からしか見れないけど、こっちの人は違うところから見てる。同時代に生きてるんですけど、ものの見方が全然違うんですよ。

小林：要は知識じゃなくて自分の経験値とその身体的感覚を信じている。情報ばかりが先行している時代に、それを気持ちよく裏切ってくれている。

●自分の身体を信じる

小林：若い人で移住する人は他にもいるんですか？　嫁不足とかありそうですよね。

奥山：移住者はいるけど、ある程度の年齢の人が多い。隣の町は深刻な嫁不足で、外国から呼んでいます。雫石の場合、そこまで割り切れてないんです。

小林：僕のいた所も、年齢がいってお嫁さんもらったって聞いた３人に１人はタイ人。村の運動会に行くと、お昼のお弁当の時間、家族がそれぞれ輪になって食べているんだけど、ぽつんぽつんとタイ人女性がいて不思議な光景だった。この村どうなるんだろうという、シビアな問題もありますよね。

奥山：ありますね。特に長男にとっては、土地って呪縛みたいなもの。この土地をどうやって継いでいくか。それに実際に、嫁として入るって大変なことだと思う。村の色んな約束事や行事、本家と分家の関係……本家が田植えを終えないと分家は田植えはできないとか。結局そういうのを上手く取り仕切っていくのがお嫁さんの役目なんです。

小林：そういう土地に８年いらっしゃって、奥山さん自身が一番変わったのはどの辺ですか？

奥山：それは身体感覚というか、手を使ってやるということ。例えば家が雪で潰れるから雪囲いを作らなきゃとか、そういうのをなんでも自分で作ったり。自分の身体を信じるようになったのはすごく大きい。

小林：頭に詰め込む情報じゃなくて、むしろ身体？

奥山：重いものがあって運べなかったら、例えば２ヶ月筋トレしたら運べるようになるだろうみたいな、そういう身体感覚です。すごい大袈裟に言うと。

小林：僕も去年、長野で山小屋作ったんですよ。向こうに行って作業すると、頭の中を空っぽにして身体を動かす。例えば土手を延々３日かけて平らにするとか。そうすると、近所にも薪割してる人とか猟師の人とかいて、その人達はその道のプロなんですけど、本から得た知識ではなく、長い経験や、そこの人達共有の情報を持っていたりする。そういう東京にない地方の底力ってあるなと。

奥山：リアルな体験がいくつもあるから本なんか読まなくていいんだと思いましたね。自然がすごい我侭なんで、自分のペースがなかなか作れない。特に冬は、忙しくても雪が降ったら雪かきをしなくちゃいけないし。１日に５、６時間も雪かきをひたすらやり続けて、そういう日が何日も続くと他のことなんか考えられなくなる。そういうのを繰り返しているうちに、自分の身体っていうか、そういうのを信じるようになりましたね。

小林：この間、アンリ・カルティエ=ブレッソンの記録映画の試写会を見ていて、その中でブレッソンが言っていた言葉に「一流の写真家を目指すのはばかげている」という意味の言葉があって。「写真を撮る為に生きるんじゃなくて、生きているから写真は生まれてくる」と。それをこの写真を見た時にすごい思い出した。

奥山：あと、この土地に住んでいていつも感じるのは、生命に対してすごいリアルなんです。生き物に対して都市の人と田舎の人の感覚って全然違う。

小林：僕のおじさんは昔、趣味で鉄砲撃ちの猟師をしてたんです。だから僕は子供の頃、ウサギとか、キジとかよく食べましたよ（笑）。

奥山：人間の生死についても感覚が違う。身体が不自由になって働けなくなったら自ら死んでしまう人もいたりします。傍から見てると、とても痛ましいし、残された家族はやっぱりやりきれない。ずっと働くっていうのが当たり前のことだと思っているから、働けなくなるということがすごい恥ずかしいことなんでしょう。

小林：身体感覚を自分の中に見つけたということと同じように写真が変わってきたことはありますか？

奥山：シャッターを押すまであんまり考えなくなったのかもしれないですね。もっと自然に押せるようになった。それとシャッターを押すのと同じように暗室作業がすごく重要になった。デジカメとマウスで作ることにすごく抵抗があって、できあがった写真は同じかもしれないですけど、なんか違うんじゃないかなと。

●東京がすべてではない

小林：地方で写真をやっていくのは大変ですよね。この前、実家に帰った時にレリーズを東京に忘れたんです。それを５軒くらい回ったら１軒も置いてなかったですね。フィルムや印画紙はどこで？

奥山：仙台のラボに注文して。コマーシャルの方はかなりデジタル化が進んでます。結局コストがかからないから、アッと言う間に皆が使うようになった。印刷の仕上がりはこだわらなかったりするので。

小林：普段、盛岡を中心に広告写真をやっているんですか？
奥山：観光のパンフレット、ポスター、雑誌とか色々やりますが、僕はフィルムで。まわりの人はほとんどデジタルですね。それと面白いのは、おじいさんが「おらの家、撮ってくれ」とか。期待されているのは町の写真屋さんみたいなこと。古いコンパクトカメラが動かないって持って来たり。おばあさんがある日突然写真を持ってきて、「おじいさんが育てていた菊の花の写真をあげる」って（笑）。

小林：写真を表現にしよう、写真が絵画のような表現になるっていうこと自体、あんまり知らないでしょうね。そういう世界で、もう説明しなくていいかという諦めはないんですか？

奥山：そうですね、諦めというか……。初めて撮る時は「おじいさん、いい顔してるから写真撮らせてよ」って。「何がいいんだ？こんな顔」「いや、それがいいんだ」みたいな会話で。結局写真表現という行為を伝えるのってあまりにも困難だし、表現すること自体が個人的なものとなっています。「岩手山を撮った方がいいよ」みたいな世界で、その人達に伝えるのって難しいですよね。

小林：写真だけじゃなくても世の中って東京が中心みたいなところがある。自分は置いていかれちゃうんじゃないかみたいな焦りは？

奥山：もともとその中心にいたという感覚もないんです。もともとはずれたところにいるから。

小林：僕は地方にいる時、ムチャクチャ東京が気になってしょうがなかった。常にそっちばっかり見てた。週末、気がつくと東京に来て撮っていた。もし僕だったら、穏やかな気持で地方だけを撮れなかったなという思いがあるんです。

奥山：僕は東京が全ての中心ではないという感覚があって、それは関西で育ったっていうのも大きいと思うんですよね。関西の人って皆そう思っている。

小林：日々色んな東京の情報が入ると思いますが、表参道ヒルズオープンとか、おじいさんのラジオからもしょっちゅう流れている。そういうのは？

奥山：東京は東京の良さもあって、東京の役割もあるんだろうけれども、自分が生きてる場所というのはここだから、ここにないものを比べちゃってもどうしようもない。「ここはここだし」と思ってますね。

小林：１人じゃなくて家族として住んでるというのも大きいですか？

奥山：それはあんまりないような気がしますね。家族が拠り所っていうより、この地域に生きているという感覚が強い。この土地に住んでいて不安なのは、土地を作ってきた上の世代が皆いなくなるというのはもうわかっていることで、その時が来た時に土地ってどうなるんだろうっていうのは常に思っています。

小林：そうですね。その下の世代というのは、都会の人達とそんなに変わらない感覚ですか？

奥山：僕も含め、若い人と上の世代はやっぱり異なっています。とくに土地とともに生きてきたという意味で。だからこそ上の世代が消えたときに土地はどうなっていくのかと。その部分を自分の中でしっかり見ていきたいと思っています。

２００６年５月２９日（リクルートＧＩＮＺＡ７ビル）